

2025 年小教区評議会役員研修会報告

■テーマ： サイクルテーマ②「共同体づくり」

「希望をもってともに歩む共同体」

■対象：ブロック担当司祭、協力司祭、宣教司牧協力者、小教区評議会役員

■講師：高山 徹神父(大阪高松教区司祭)

日本シノドス、アジア大陸別シノドス(バンコク)、小教区司祭のシノドス(ローマ)に参加

■日時：2025 年 5 月 24 日(土) 14:00~15:30

■開催方法：オンライン(ZOOM ミーティング)

■参加端末：総端末数 78

■内容：通常聖年「希望の巡礼者」の歩みの中でのシノドス的な教会共同体づくり

高山 徹神父 講話 要旨

「一人ひとりの存在と働き」という観点から話をする。

・立場の異なる人を尊重し共に共同体を作る ・ともに祈り、祈りを分かち合う ・神が望んでおられることに気づくこと、がともに歩む教会になっていくために欠かせないものであり、シノドス的な教会の特徴として、 ・ともにある教会 ・ともに担う教会 ・ともに考え、祈り、識別する教会が上げられる(「シノドスハンドブック」より)。

誤った聖職者主義の克服が課題である。また霊的な深まりと愛のある組織とは両輪であり、組織の運営を考えるにあたって、ともに祈り、みことばから始めるシノドスの共同識別が根本的な教会の姿勢である(アジア大陸別シノドスでの体験から)。

「このようなわたし」でも一人ひとりに存在意義があり、共同識別のためには全員が自ら祈り、思考することがシノドスの基盤である。一人ひとりが誰も例外なく必要な存在である。更に共同識別の根幹に徹底した個々人の識別がなければ「凡庸な悪^{※1}」を生む危険性がある。

またシノドス的な教会を目指す時に非難に晒されることもある。柔和さ謙虚さを備え、リーダーシップの養成をすること、サポートを得ることが大切である。シノドス的な教会にはシンフォニー^{※2}のようにカリスマと奉仕職が作り出すハーモニーが必要である。そしてこれらすべての根幹に私たちを力づけ、結び付けてくださるキリストがおられることを忘れてはならない(小教区司祭のシノドスでの体験から)。

結びとして一人ひとりがともに懸命に祈り、神の恵みと出会いに感謝し、その人らしく誠実に生きること尽きると思う。今の教会は見えない霊、神の恵みに信頼しそこに賭けていくことに弱くなっていないだろうか。

書記注

※1 人間には根源的な悪意がなくても、思考を停止し、上からの命令に盲従したり、思考せずに周囲に流されたりすることによって、悪事が引き起こされるという考え方(ハンナ・アーレント)

※2 交響曲。ギリシャ語の「共に響く」が語源。

大塚司教コメント

講話の結語から自分なりに感じたことをここで分かち合う。

- ・ともに懸命に祈る

小教区評議会のメンバーがまずシノドス的な仲間となることから始め、祈りに始まり祈りに終わる教会の活動の中で祈りが「形式」にならないよう、ともにいて下さるイエスを常に意識し、聖霊に聞くことを大切にする。

- ・神の恵みと出会いに感謝する

一人ひとりの能力ではなくよい点を見つけて感謝し、それぞれのよさを合わせて小教区の運営に携わる仲間となっていく。

- ・その人らしく誠実に生きる

役員に選ばれた経緯に関わらずそれは神の選びであることを思い、その人らしくその人のままで今の共同体に奉仕するように招かれている。

企画室ふりかえり

高山神父が、小教区の現場で働く司祭としてシノドスのプロセスに参加してこられた体験から導き出されたシノドス的教会となるために大切な視点が、「一人ひとりの存在と働き」にあるということ、そして「祈り」、「感謝」、「その人らしく誠実に」というキーワードは、役員の皆さんにとって印象深かったようだ。

キリストが中心におられる共同体として、メンバー一人ひとりがお互いを大切にし、能力や効率ではなく「その人らしさ」を尊重し、祈り合い、感謝し合いながら歩んでいくことがシノドス的共同体になっていく基盤であるという学びであった。後日、小教区評議会で、もっとお互いのよいところを見つけて大切にしていこうという声が聞かれたという報告もあった。

一見目立たない地道なこの歩みが教会で今もいつも大切にされていくことを念頭に置いて、今後も研修を企画していきたい。